

---

## それのおとしもの f 新たな刺客!?

くー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そらのおとしものf 新たな刺客!?

### 【Nコード】

N2739P

### 【作者名】

くー

### 【あらすじ】

相変わらずな智樹たちの前にある日現れた新しいエンジェロイド。彼女たちが引き起こす新たな問題。智樹たちは無事平和な日常をとりもどせるのか!?

そらのおとしものfの二次創作です。

ぷろろーぐ

ある高台に柔らかそうな栗色の髪の少女と日の光を浴びキラキラと輝くオレンジ色の髪をした少女が立っていた。

「ここが空美町…。ほんとにこんな所にエンジェロイドが？  
栗色の髪をした少女が眩く。」

「…コクリ…。」  
その問いにオレンジ色の髪の少女は静かに頷いた。

ところ変わって智樹宅。

「イカロース!!どこだー?ちよつとこーい!!」

少年が叫ぶとすぐに1人の少女が部屋へやってきた。

「…なんでしょうか?マスター?」

薄いピンク色の髪の毛、澄んだ目。そして、天使のような真っ白い翼。

一目見ただけで彼女が普通の人間でないことはわかるだろう。

「おお、イカロス！そんなところに！！…早速なんだがお前に頼みたいことが…（ニヤリ）」

少年が彼女に近より何やら耳打をちし、彼女は懷からカードを取り出し呟く。

すると、目映い光に包まれ少年の周りに大量のパンツが降ってきた。

「うひょ…うひょひょひょ…。」

少年はおもむろにパンツを手にとると、躊躇う事なく頭に被り踊り出した。

「ぐふふふふ！ぐひよひよひよっ…！？」

しかし、先ほどのまでのムードは一転、殺気じみたものになった。

「どうも～ちゃん！～！」

「あ…あああ…そ、そはらさん…？」

少年は背後に立つ少女に頭を掴まれ、そして必殺、『そはらチョッ  
プ』が炸裂した。

「いてててて…。」

「もう！ともちゃんてばエツチなんだから！！だいたいイカロスさ  
んも……」

少年と翼の生えた少女に説教している少女。

見月そはら。

少年の幼なじみであり殺人チョップの持ち主。

頭に特大のたんこぶを作って正座している少年。

桜井智樹。

平和をこよなく愛するごく普通の中学生である。

そして、純白の翼が生えた少女。

イカロス。

ある日突然智樹の元へ落ちてきたエンジェロイドである。

彼女が来てから智樹たちの生活は劇的に変わった。

しかし今では楽しく暮らしている…らしい。

「智樹いー!! あたしのアイス食べたでしょー!!」

説教も終盤に差し掛かったとき、急にドアが開き1人の少女が入ってきた。

少女の名はニンフ。

イカロスと同じエンジェロイドで、水色のツインテールに小さい身体。

見た目はとても可愛らしいのだが…

「ふざけんなっ！！俺は食ってねえぞ！」

「じゃあ、誰が食べたって言うのよ！」

しばらくニンフと言いつつ合っていた智樹だったが、最後の一言で言葉につまってしまった。

「やっぱり、あんたが食べたんじゃない！！！」

「だーかーらー！俺じゃねえっつうの！！！」

お互いに睨み合っていたとき…

「あのー、ニンフ先輩？先輩のアイスってこれですかぁ…？」

黄色い髪の毛にイカロスをも上回るナイスバディの少女が顔を出した。

彼女はアストレア。

彼女もまた背中から翼を生やしている。

イカロスやニンフと同じエンジェロイドだ。

「…あ、あはは…」

そんな彼女の手にはさっきまでニンフが言っていたアイスの棒が握られている。

「デルタぁー！！」

「ふわぁ！？ニンフ先輩がキレたー！！」

「待ちなさいー！！」



怒ったニンフをみて一目散に逃げ出したアストレアを追いかけてニンフも部屋を出ていってしまった。

「…よし、俺も用事あるしそろそろ…」

「ともちゃん？どこいくのかな？」

この騒ぎを良いことに自分も立ち去ろうとしたのだが…

そはらに目ざとく見つけられ元いた位置に連れ戻され……そこから  
はご想像にお任せする。

とにかく今日も平和である。

しかしこの平和が壊されることになろうとは誰も思ってもいなかった。

## 新たな刺客!?

（翌日）

「おはようございます。マスター。」

「んー、イカロス？今何時だ…？」

起きたばかりでまだ寝ぼけている智樹が聞く。

「…8時です。」

それに答えるイカロス。

「そうかー…って！8時い！？遅刻だー！！」

時間を聞いた瞬間今までボーッとしていたのが嘘のように焦り出した。

「あの…マスター、今日は「そんなこと言ってる場合じゃない！！」てゆーかお前も準備しろー！！」

何か言おうとしているイカロスを無視して慌てて準備をする智樹。

その時、ひょこりと現れたニンフによって衝撃的な一言が放たれる。

「智樹、なにやってんの？今日は日曜日じゃない。」

「…なにい！？まさか……はっ…」

「そんなことより、アルファ、お腹空いたー。」

「…朝ごはんにしましょう。」

それっきり固まって動かなくなった智樹を放置し、ニンフとイカロスは朝食を食べに居間へ向かった。

「いやー、全く。とんだ勘違いだ！」

ご飯を頬張りながら智樹が呟く。

「あんたがアルファの話し聞かないから…モグモグ。」

「平日と休日を間違えるなんて…ばあーか!!」

そんな智樹をバカにするニンフとアストレア。

「んだとー!!? てか、アストレア! お前にだけはバカって言われたくねーぞ!!」

「何よ、ばあーか!!」

「んがー!!」

段々とエスカレートしていく2人を尻目に呑気にお茶を飲むニンフ。

イカロスは朝食の後片付けをしに台所へ向かう。

今日も平和な1日が始まるかと思っていた時…

ブワッ  
バリィン！！

「きゃあつ、なに！？」

「ぐふうっ！？」

「ッ！！マスター…！」

「何よ、この風！？」

突然の突風と共に何かがガラスを突き破り家へと入ってきた。

「むう…な、何だー！？」

埃の中から現れた？何か？を見た瞬間ニンフが驚きの声を上げた。

「…ッ！！お前は！？」

「ニンフ、ソイツを知ってるのか！？」

智樹が驚いたように聞く。

「うん…。アイツは…あたしと同じ時期につくられたエンジェロイド。」

「なに！？」

「ふん…ニンフか…。随分と久しぶりだな。」

そう呟いた彼女はイカロスたちとはまた違った美しい薄緑色の翼を  
ふわりと広げた。

「…お騒がせてすまない。わたしは遠隔戦闘用エンジェロイドタイ  
プΩ（オメガ）レアーだ。」

「オメガ、どうしてここに！？…まさか、あんたも智樹を！？」

それを聞いた瞬間イカロスが智樹を庇うように前へ出た。

「フ…勘違いするな。わたしはシナプスからの遣いではない。…そ  
もそもシナプスとはどうの昔に縁をきった。」

「え…？　どういことよ！？」

「縁を切ったって、どうやって！？」

その言葉を聞いて動揺を隠せないニンフとアストレア。そしてイカロスも目を細めた。

「それは…後々話そう。とりあえず安心しろ。その少年には手を出さない。？ 私達？ はイカロス、貴女に会いに来た。」

「…え、わたしに…？」

「ああ、貴女にどうしても会いたいと言うヤツがいてな。…来い。」

そこまで言うと、レアーは振り返り手招きした。

「……。」

割れた窓から入ってきたのは、オレンジ色の髪に水色の翼、

そして赤い三日月のような模様が入った透青の右目をもったエンジエロイドだった。

「…ッ!! ティアー!?!」 「あ…イカロス…。…久しぶり。」

控え目にお辞儀する彼女にイカロスが歩み寄る。  
そんなイカロスの行動にみんな首を傾げた。

「あの…イカロ…「ティアー…。」

「あ…。」

そしてイカロスはそのまま彼女の頭を撫でた。

しばらくイカロスに頭を撫でられていた彼女はハッと何かを思い出したように顔をあげた。

「あ…っと、イカロス、あたし…」

「…ティアー?」

なかなか言葉に出さない彼女にイラついたのか、黙って見ていたレーアが口を挟んだ。



「こほん…実はだな、もう一人来てるんだ。」

「もう…1人？」

「それってエンジェロイド！？あたしたちの同期ってそんなにいたっけ？」

「どんなエンジェロイドですか？ティアー先輩？」

みなが色々と言うなか、とても気まずそうに1人の少女が現れた。

さらさらとした栗色の髪の毛に茶色がかった瞳。

形のいい桃色の唇が引き立つ真っ白な肌。

「おお…！人間みたいですわね…！」

「おめえはバカか！？どっからどう見ても人間だろうが…！だいたいい羽ねーし…！」

智樹の鋭いツツコミをくらいようやく気付くアストレア。

「ほんとだ！羽がない！！」

その顔には驚きの色が浮かんでいた。

「えっと…、どうしてオメガと人間が一緒に？」

ニンフが少々戸惑いながら聞く。

するとアストレアもうんうんと頷いた。

「あー…それはだな。まあ、取り合えず紹介させてくれ。ティア。」

「あ、うん…。あたしは、戦闘防衛用エンジェロイドタイプΛ（ラムダ）ティアーです。イカロスとは昔からの知り合いでした。…これからよろしくお願いします。」

そう言って丁寧にお辞儀をする彼女をみて智樹は苦笑いを浮かべた。

「そんなに堅くなんなくとも良いって。まー、ようするにイカロスの友達だろ？」

そう言うってから、茶髪の彼女に目を向けた。

「んで、そっちは？」

「あ…あたしは、この子たちの…マスター…でいいのかな？…の立<sup>タ</sup>花咲希です。」

「…え、ええええ！？マスター！？嘘じゃないよな！？」

「ああ。咲希はわたしとティアのマスターだ。」

驚きのあまり口をぱくぱくしている智樹の問いに、あっさりと答えるレアー。

「う、うそ…人間につかえるエンジェロイドが他にもいたなんて…。」

信じられないと言わんばかりにニンフが言う。

「…ティアー、なぜ…その人をマスターに？」

そんな時、唐突にイカロスが聞いた。

「…！それは…話すと長くなるけど…いい？」

その問いにイカロスはコクリと頷き、アストレアは

「聞きたい！聞きたいです！」

と興奮ぎみに叫んだ。

「ん…わかった…あれはあたしがまだつくられたばかりのとき…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2739p/>

---

そらのおとしもの f 新たな刺客!?

2010年12月10日17時17分発行